

詩集千羽鶴

湯本 岩夫

著者略歴

一九三〇年四月 東京都生まれ

一九五三年三月 中央大学法学部卒業

現在

弁護士

東京地方裁判所調停委員

埼玉詩話会々員

詩集 千羽鶴

定価 金一五〇〇円

発行 一九八九年一〇月一五日

著者 湯本岩夫

発行者 湯本律子

発行所 有限会社エメラルド

埼玉県浦和市領家六丁目二番一六号

電話〇四八（八三一）二七五五番

詩集
千羽鶴

湯
本
岩
夫

詩集
千
羽
鶴
・
目次

八幡山

九頁

春

一二頁

春のプラット・ホーム

一四頁

千羽鶴

一六頁

手紙

一八頁

男の詩

二二頁

流れ

二六頁

夜の地下道

三〇頁

雨

三二頁

雨の日に

三四頁

雨の歩道

三六頁

秋空

四〇頁

初秋の午後

四四頁

秋風

四六頁

秋雨	四八頁
夕暮れ	五〇頁
一日の終わりに	五四頁
夜に	五八頁
曇天	六〇頁
アパートの二人	六二頁
あした	六六頁
きざし	六八頁
誕生	七二頁
共稼ぎ	七六頁
サラリーマン	八〇頁
貧しき画家	八二頁
バカンス	八六頁
砂丘	八八頁

秋雨	四八頁
夕暮れ	五〇頁
一日の終わりに	五四頁
夜に	五八頁
曇天	六〇頁
アパートの二人	六二頁
あした	六六頁
きざし	六八頁
誕生	七二頁
共稼ぎ	七六頁
サラリーマン	八〇頁
貧しき画家	八二頁
バカンス	八六頁
砂丘	八八頁

建築工事現場	九二頁
夕立	九四頁
ノスタルジア	九六頁
雷雨	九八頁
ある対話	一〇〇頁
山の中にて	一〇二頁
犬の遠吠え	一〇四頁
ゴースト・タウンにて	一〇五頁
冬	一〇八頁
あとがき	一二頁

八幡山

晩秋の日差しは遠く
男体山を燃やしていました

杉木立を縫う細道を

手をつないで歩いて行く二人

足下で枯草がなった

点在する芝生を敷いて

未知の世界を見極めようと

恐る恐る見つめ合い

未来について

秋風に語った

——時間のあるのが憎らしかった——

いつしか暮れた秋の日に

人影もなく

燃えていた山々も消え

八幡山の空は

プルシャント・ブルーに凍りつき

青銅の二人に

幸あれと見守っていた

つるべ落としの寒気は

いつまでも いつまでも

黙って座っている

二人には感じられなかった

頭上にのしかゝるしいの木は

大きく羽ばたけと

両手を大空に伸ばしていました

一番星が一つ

春

窓硝子は湯気で曇り
暖かい日差しが柔らかく
庭の緑を伸ばしている

曇り硝子に絵を描くと
過ぎ去った冬が
未だ指先に顔を出す

体内に宿っていた命が
大きく背伸びをして
あくびを一つ

白い壁に体当りをしたが
はね返されてしまった

たゆまずやれ

やがて壁は少しずつ消えて
青い空が私のものになる

春のプラット・ホーム

淡い風が頬を撫で

黄色い太陽が二つ、三つ

プラット・ホームに鈍く差す

—— 気をつけてね

皆様に宜敷くね ——

ゆるく流れるホームに

佇む人の影が揺れる

列車は暖かい尾灯を

いつまでもホームに残す

影と星

行く手に春が待っている

動き出した群れは

早く遠くざわめき

靴と下駄が

春のブラット・ホームにソナタを奏でる

外は鳥が、緑が、

体内で血がうずいている

窓辺に光がおどり

むらさきの煙りがたわむれる